

V 伝沖ノ島出土返納品の金属製品の検討

水野 敏典 奈良県立橿原考古学研究所

要旨：伝沖ノ島出土返納品のうち、銅鏡、石製品、甲冑類を除いた金属製品および貝製品の調査を行い、既報告資料との対照をすすめた。沖ノ島祭祀に特徴的な「雛形鉄刀」や「金銅製瓔珞」と報告された短冊状銅板のほか、金銅製責金具、小型の「鐸」など多様なものを確認する機会を得た。7号遺跡出土品と同型式の子持剣菱形杏葉片を複数確認するとともに、倭装大刀の装具片とみられる金銅板を確認したことで、沖ノ島祭祀における倭装大刀の奉納量が報告記載よりも多い可能性を指摘でき、同時に鉄製武器類が倭製に偏るという従来の見解を補強した（水野2025）。その一方で「花文」と蓮の「花卉状」の打ち出しをもつ銅板片や細長く加工された貝製玉を確認したが、報告書内に直接の類例を確認できなかった。貝製品や銅板片については今後も調査を必要とするが、返納品中の沖ノ島祭祀独特の奉納品や、同型品が多数認められることから、沖ノ島祭祀奉納品としての一括性を認めて良いと考える。

キーワード：雛形鉄刀、短冊状銅板、鐸、倭装大刀、貝製玉類

はじめに

「伝沖ノ島出土返納品（以下、「返納品」とする）」のうち、銅鏡、石製品、甲冑類を除いた金属製品、貝製品等を担当した。対象資料は、非常に多様で、多くは破片である。そのため器物の性格が明確にならないものも多かったが、まずは、個々の遺物の報告を行い、既報告の祭祀遺跡出土品との対照から出土遺跡の候補を示しつつ、個々の遺物の検討を行った。

第1章 鉄製品（図1、図版1）

両端が欠損した細長い板状の「雛形鉄刀」片および「鉄製円盤」、棒状の工具片、金銅板を被せた馬具片、「鐸」が確認できた。

雛形鉄刀

1 残存長9.2cm、右端で最大幅1.4cm、残存重量9.7gとなる。図示した上方がやや厚く0.2cmで背となるとみられる。片面が平滑なのに対してもう一面はやや膨らみを持つ。刃部側は全く研磨されておらず、端部は0.15cmと薄くなるものの刃部を持たない。木質等の付着物は確認できない。

2 残存長5.1cm、最大幅1.6cm、最大厚0.3cm、重量7.3gである。背をもち、刃部側は薄くなるものの、研磨による刃部は確認できない。片面が平滑であるのに対して、もう一面はごく薄くカマボコ状に膨らみを持つ。付着物は確認できない。

3 残存長4.8cm、最大幅1.3cm、最大厚0.35cm、重量5.0gである。背をもち、刃部側はやや薄くなるものの、厚さ0.15cmと刃部を持たない。切っ先状に幅を狭めている。片面が平滑である。付着物は確認できない。

4 現状で2片が接合し、残存長4.7cm、最大厚0.2cm、重量3.4gと、背を表現する意図は窺えるものの、刃部側は厚さ1.2cmと刃部を持たない。全体に板状である。

5 残存長4.2cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量4.0gである。刃部側は厚さ0.1cmと刃部を持たず、板状である。

6 残存長2.3cm、幅1.4cm、最大厚0.25cm、重量2.0gである。刃部側がわずかに薄くなるが明確ではなく、板状である。

7 残存長6.3cm、幅2.1cm、最大厚0.4cm、重量16.3gである。片面が扁平であるのに対して反対側はややカマボコ状に膨らみ、背が最大厚とならない。付着物は確認できない。

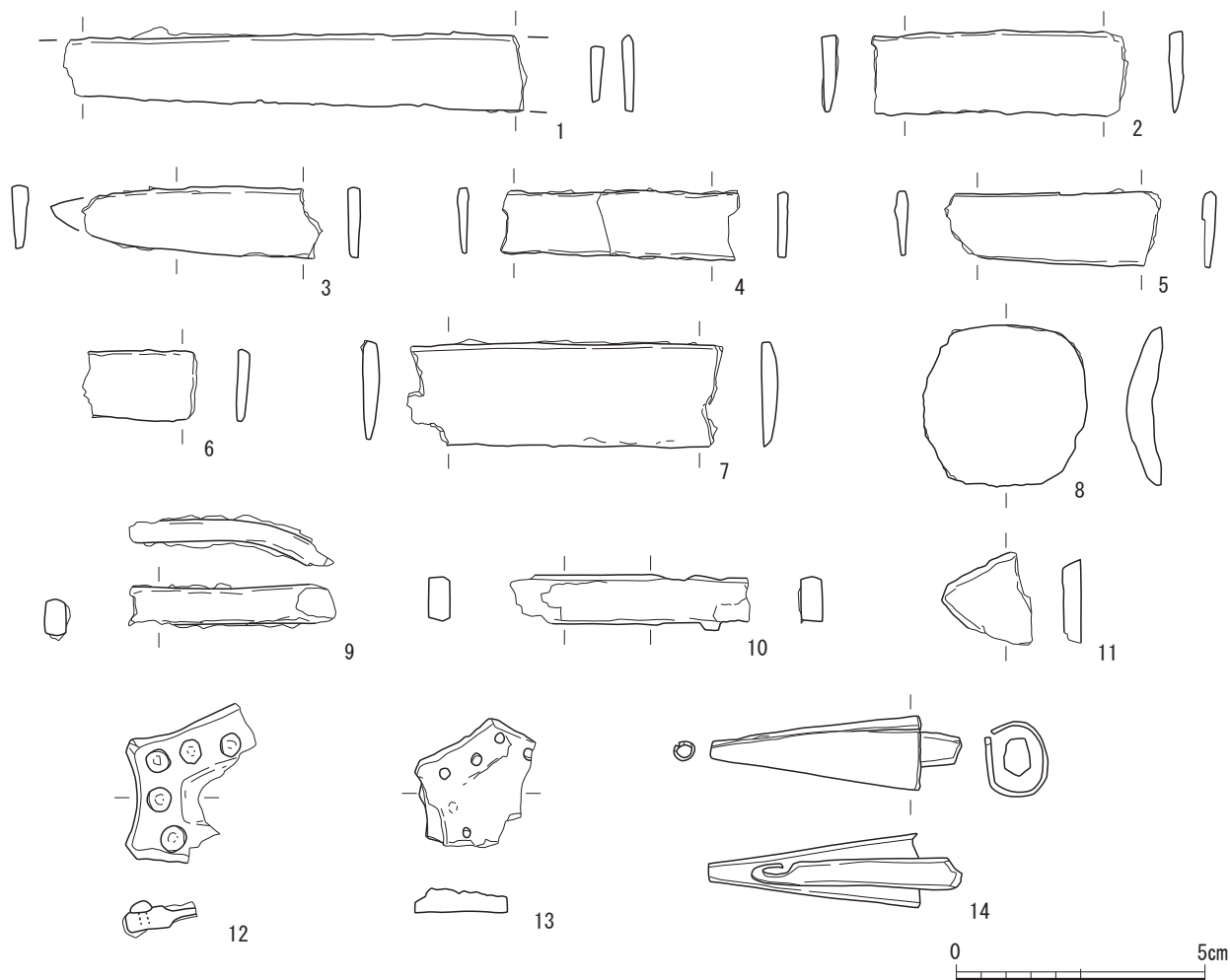


図1 鉄器・その他金属器

1～7は、両端が欠損した細長い板状鉄片である。長側の一端がやや厚く、既報告での「雛形鉄刀」とみられるが、刃部関や茎部は確認できない。いずれも片面が扁平となる傾向が強く、刃部側をやや薄くする簡易な加工は行うものの、明確な刃部をもたない。鞘や柄装具となる木質等の付着物も確認できなかった。

「雛形鉄刀」は、刃部幅は2 cm以下と小型で、刃部が明確でなく直刀の雛形品とみられる。1号、4号、5～9号、21～23号に類例が確認できるが、木製装具痕跡の有無など、様相は異なる。沖ノ島祭祀に特徴的な鉄器といえる。

鉄製円盤

8 縦3.2cm、幅3.2cm、厚さ0.6cm、重量11.6gの扁平な円板状の鉄器である。正確には丸みをもった六角形の平面形である。表側は中央にやや膨らみを持つものに対して、裏面は周囲に平滑な面をもちつつ、中央付近にやや窪みをもつ。刃部や装飾は確認できない。裏面に織物状の繊維痕跡が付着するが、固定のための小孔などは確認できない。

同様の「鉄製円盤」の類例は、1号遺跡にある。直径3.6cm前後と6.4cm前後の大小があり、そのうちの小型品と同型式である。いずれも固定や吊り下げのための円孔などの造作がないのが特徴である。今

回、やや窪みを持つ裏面に織物痕が確認できたことから、織物の上に糸や紐を掛けわたして固定した装飾品の可能性をもつ。

棒状鉄器片

9 両端の欠損したやや彎曲した棒状で、残存長4.2cm、幅0.65cm、厚さ0.4cm、重量4.3gである。工具など柄片とみられ、断面は扁平な矩形である。

10 両端が欠損した棒状の鉄器である。残存長4.8cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重量5.1gの棒状で、扁平な矩形の断面をもち、鉄地は金銅板とみられる金属に覆われている。X線画像でも鉋孔等は確認できない。

9は、鉋などの工具片であれば、6号、21号遺跡と関わる可能性を持ち、10は馬具片の可能性を持つが部位は特定できない。馬具であれば4号、6～9号遺跡が採取地点の候補に挙がる。

その他

11 残存長1.7cm、最大幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1.6gである。残存する三角形で板状の鉄地で金銅板とみられる金属に覆われる。X線画像の観察でも鉋孔などは確認できないが馬具の辻金具などの可能性がある。馬具であれば4号、6～9号遺跡が採取地点の候補に挙がる。

子持剣菱形杏葉片

12 残存長3.2cm、最大幅2.8cm、厚さ0.5cmの板状で、重量5.7gである。子持剣菱形杏葉（報告名称：剣形附飾扁円剣尾形杏葉）の子持部の破片である。直径0.3cmの鉋孔5ヶ所を確認でき、鉋頭は円形で径0.5cm高さ0.2cmであり、ベースとなる地板に対して幅0.8cmの鉄製フレームを重ね、その上から金銅板を被せている。鉋頭は黒色化しており、銀板を被せている可能性が高い。

13 残存長2.8cm、最大幅2.3cm、厚さ0.45cmの板状で、重量5.7gである。目視では鉋孔を確認できないが、X線画像では縁に沿って6ヶ所の鉋孔を確認でき、地板とフレームを確認した。鉋頭は残っていない。12と同様の子持剣菱形杏葉の破片とみられる。

7号遺跡に子持剣菱形杏葉片が出土しており、そ

の子持部分と法量も近く、それと同一個体、もしくは同型式の杏葉片とみられる。同型式自体の出土が珍しく、福岡県王塚古墳や奈良県条池北古墳など、類例は限られている。

鐸

14 円錐形の銅板と鉄棒を組み合わせた全長6.0cmの「鐸」である。厚さ0.1cmの銅板を全長4.2cm、最大径1.5cmの円錐形に丸め、その中に全長4.8cm、幅0.4～0.6cm、厚さ0.5cmの断面方形の鉄棒を入れて、舌としている。錆びて固着しているが、X線画像により円錐端側の鉄製舌は、細く鍵手状に曲げられており、これに紐を掛けて円錐状銅板の先端の隙間から通すことで鐸としたとみられる。

既報告では「銅鐸」あるいは「鐸」と呼称されている。銅板の筒形品は1号、4号遺跡にもあるが舌の報告がない。本品に形態と法量の酷似したものが5号、6号に確認できる。

第2章 金銅板片・金銅製品（図2、図版2～4）

多数の金銅板片および銅椀片などを確認したが、大半は細片であり、器物の性格は明らかにし難いものが多い。特徴のある主要なものを報告する。また、図番号と写真図版の番号にズレがある場合には、写真図版番号には括弧を付けて表記する。

刀装具

1 残存幅3.0×2.9cm、厚さ0.5mm、重量1.9gの金銅板片である。2列の円文がならぶ。円文は径1.0mm前後、高さ0.2mm程度の突起をもち、その周囲とそこから延びる線は連続する径1.0mm前後の点状の打ち込みで構成されている。錆に薄く覆われるが金鍍金が現状でも確認でき、いわゆる倭装大刀の鞘金具とみられる。倭装大刀は、振り環頭大刀が出土した7号遺跡や頭椎大刀の装具片が確認できる8号遺跡に類例はあるが、同型式の鞘金具は確認できていない。

2 幅2.3cmの帯状の銅板で、両端が欠損する。現状で長さ4.2cm、厚さ0.5mm、重量2.1gの銅板で、卵

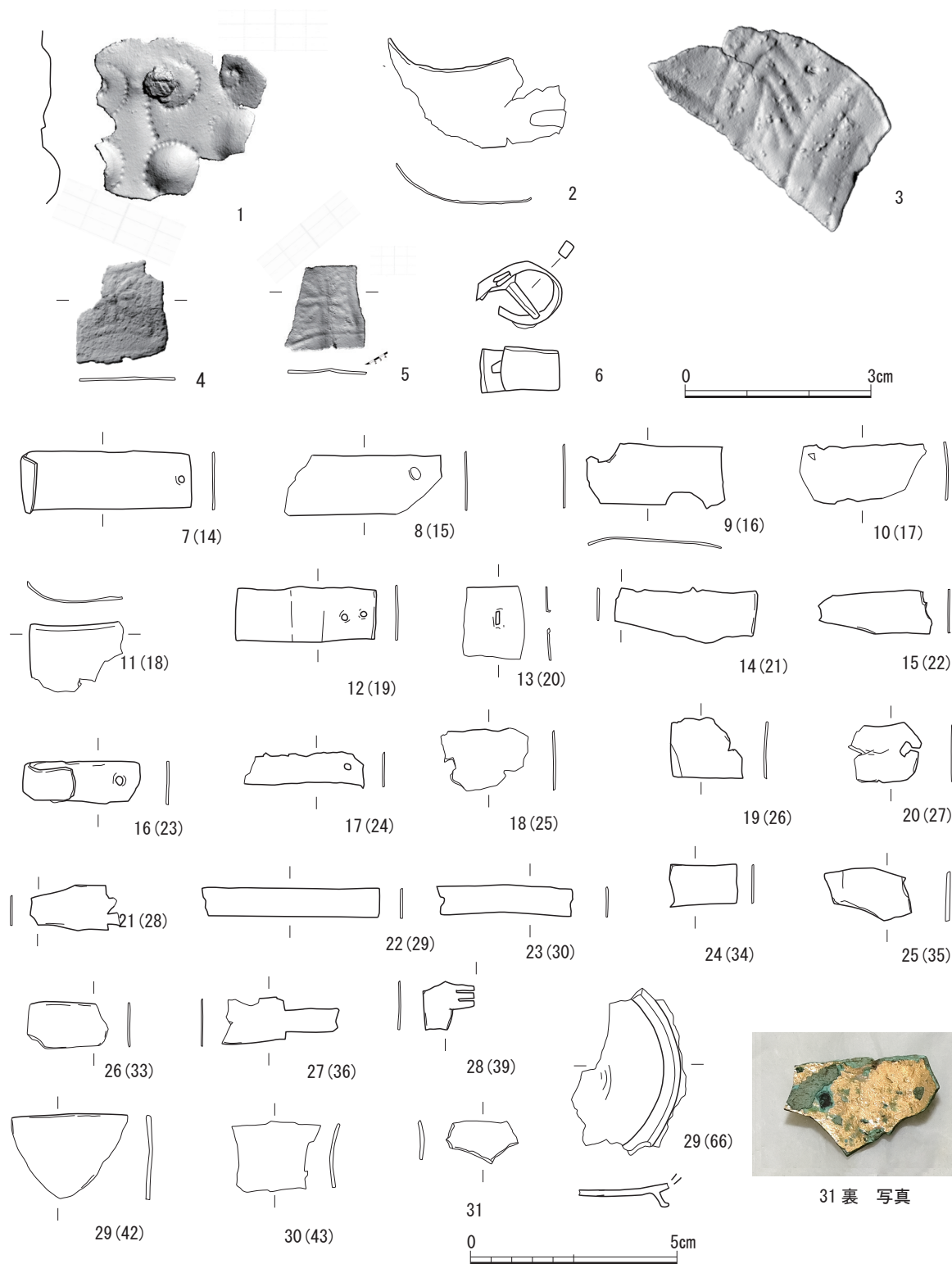


图2 銅製品等 実測図

形に彎曲する。大刀の装具の可能性をもつ。文様はなく、付着物も確認できない。他に刀装具になる可能性を持つものに18（25）がある。銅板の幅は1.5cmで、やや彎曲が強く、厚さ0.4mm、重量0.4gである。

その他にも、11（18）など、幅が1.4cmを超えるもので、彎曲があるものは短冊状銅板ではなく、刀装具となる可能性がある。

打ち出しをもつ銅板片

3 残存幅4.0×2.2cm、厚さ0.4mm、0.9gの銅片である。蓮の花弁状の鋸歯文が3つ重なる銅板片である。銅板は扁平で、明確な彎曲は確認できない。文様は、表側からは木型などに押し付けての打ち出しにも見えたが、裏面を観察すると径1mm弱の列点により文様を打ち出している。錆びて不明瞭であるが、長さ約3mm、幅1mmほどの長方形の孔がある。蓮の花弁状に重なる文様は、全体に弧を描いており、半円もしくは円形に配置されたものとみられる。付着物は確認できない。

4 残存幅1.4×1.4cm、厚さ0.4mm、0.2gの銅片である。押し出しにより全長約0.9cmの8本の丸みをもった放射状の線による花文とそれを囲う弧線が確認できる。1や3と異なり、文様は点の連続による打ち込みによるかは明確でなく、木彫などに銅板を押し付けての打ち出しの可能性を持つ。

5 残存幅1.6×1.4cm、厚さ0.4mm、0.2gの銅片で、4の文様と酷似する。花文の周りに圈線状の囲みがあり、その外側にも並行する線が確認できる。銅板の厚み等は銅片1とも似るが、錆の付着で詳細を観察し難い状況である。付着物や明確な列点による打ち出しは確認できなかった。

4と5は、文様の法量がほぼ一致することから同一器物片、あるいは同種の破片とみられる。弧線を持つことから3と同様に半円もしくは円形に配置されたものとみられる。3～5は、これまでの出土品中に類品が明確でない。打ち出しを持つ銅板片の報告は沖津宮付近の5号遺跡にみられるが、列点状の打ち込みは確認できず、様相はやや異なるようである。垂木状の木製品の端部や瓔珞などの一部となる可能性もあり、未報告の銅板の細片がないか、確認

する必要がある。蓮の花弁状のモチーフは仏教的な要素を想起させるが、これまで沖ノ島祭祀では存在が明確ではない。時期は不明である。

金銅製責金具

6 直径1.8cm前後の径を持つ幅0.7cm、厚さ0.5mmの銅板であり、責金具とみられる。留め具として一方から長さ1.5cm、断面方形の銅釘が刺さる。明確な釘頭を持たない。穿孔後に銅板に釘を打ち込んだのではなく、柔らかい対象を銅板で包んだ状態で釘を打ち込んでおり、釘孔周辺が大きく窪んでいる。この環状の彎曲と釘穿孔の撓みを根拠に集めたものが、（7～13）である。銅板の幅は0.3～0.7cmである。

（13）は、鍵手状に銅板をつなぎ合わせている。いずれも銅板は0.5～0.7mmと薄い。

带状の金銅板を環状にして、銅釘1本で重なった板を貫き、束に綴じたものごと固定する責金具である。大きな力で固定できるような責金具ではなく、带状の銅板が釘で大きく撓むことから、綴じる対象は木材などの硬いものではないとわかる。

1号遺跡からは径の大きく同構造をもつ「金銅製麻笥環状品」があるが、5号、6号、22号遺跡からは法量の近い同型品が出土しており、金銅製の責金具も沖ノ島祭祀に特徴的な器物と言える。

短冊状銅板（瓔珞）、雛形紡織具、その他

他に金銅板・銅板片は図版3、4の（14～65）までを確認した。多くは破片であるが、短冊状の銅板が大勢を占めており、その典型が、（14～27）である。図版3の（14、15）が奉納時の姿に近いとみられ、銅板の長さは4cm前後であり（14、15、16、17、19、26）の幅1.4cm前後にまとまりをもつ。類品の（20）は幅1.7cmと幅広で短辺が緩く弧線を描き、孔も2.5×1.0mmの長方形である。孔付近に黒色の带状の付着物が確認でき、有機質のヒモとみられる。短辺の一端に1、2個の孔があり、吊るす器物とみられる。（19）は二つの孔をもつ。これ以外に幅が9mm前後で平らな銅板として（24、29、30）があり、（24、30）には円孔が確認できる。

短冊状銅板は、5号、22号遺跡に、幅の狭い銅板

は6号遺跡に類例がある。短辺の一端に一つないし二つの円孔を持つ。「瓔珞」もしくは短冊状銅板の名称で報告されている。瓔珞はインド発祥の貴人が用いる垂加する装飾品であるが、仏教との関りの強い用語で、菩薩の装身具や天蓋から下がる金銅製装飾品を指すことが多い。ただし、沖ノ島祭祀遺跡の類例も含めて短冊状銅板の両端に円孔を持つものが見当たらないことから、銅板は一枚ずつ吊り下げられており、複数が縦に接続して垂加するものではない。ここでは祭祀の場の荘厳具として理解したい。

単純な短冊形だけでなく、複雑な切込みや造作を持つものがあり、これらは雛形紡織機具と報告されたものの一部とみられる。(37)は方形孔に別の銅板を差し込んで銅板同士と繋いでいた。全体像は不明であるが類似した造作は1号遺跡の雛形紡織機台座などに確認できる。(36)は銅板に直角の切込みを持ち、紡織具のカセイと報告された1号遺跡の類例に近い。(39)は端が三本に切れ込みが入っており、同じく紡織具のタタリと報告された1号遺跡に類例がある。これらの銅板もしくは金銅板の厚さも0.5、0.7、0.9mmなどがあり、複数のセットが混在するとみられる。

複雑な切込みを持つ金銅製の雛形紡織具は、1号、5号、6号、22号遺跡に確認できる。いずれも沖ノ島祭祀に特有の奉納品といえる。

銅椀片

29(66)は、残存幅3.8×2.5cm、底付近で厚さ2.0mm、重量は6.1gで、高台から椀底にかけての破片である。底面には同心円上の研磨痕を確認できる。高台は径約5cm、高さ約4mm、厚さ1.5mmで緩く外反し、端部は丸みを持ち外側に突出する。ほかに銅椀底の形状や厚さと錆び方が類似した破片3点確認できた。他にも小片であるが近似した厚さの銅細片が多数あり、同様に銅椀片となる可能性がある。

本銅椀は、1号遺跡から多数出土する「雛形銅椀」と報告される銅板を加工した薄手のものと異なり、肉厚な点は4号遺跡出土の銅盤に似るが、より深い銅椀であり、6号遺跡出土の銅椀に様相に近い。

歩揺片

図2-31、残存長1.6×1.4cm、厚さ0.8mmの緩く彎曲する金銅片である。表裏とも鍍金されており、現在も輝きを残す。縁が欠けて全体形状は不明であるが、表裏のみえる器物として歩揺の可能性が高い。歩揺付雲珠などに付属する歩揺片とみられる。

第3章 貝製品 (図版5、表1)

返納品中の貝片は18点で、そのうち図版5-1～7は返納時にタコ糸で括られて保管されていた。人為的な穿孔が確認できるのは1～8の8点で、確認できる穿孔は各一ヶ所ずつである。8は円孔の一部が欠損していた。残る10点に円孔は確認できず、小片も合わせて全部で18点である。そのうちの15は加工痕跡の確認できないサザエの蓋であり、貝製品と断定できない。15を除く全ての貝片は貝殻の縁を打ち欠いている。貝製品としての縁部の研磨は明確でなく、奉納時の姿をどの程度残すかの判断が難しいが、円孔が確認できる1～8の全長は2.7～7.4cmで、最大幅は1.6～5.7cmと細長く加工される傾向を持つ。穿孔のない8～18も同様である。円孔は基本的に片側穿孔で、孔の径は2.1～4.4mmで、貝の厚さ2～4mmほどである。貝はかなり硬く、石製玉類と同様に加工には手間をかけている。細長い形状と穿孔から貝製玉類とみられ、貝以外の円孔をもつ出土品と同様に、垂加しての奉納が想定される。なお、厳密な貝の種類同定はできておらず、今後の課題として残るが、内面に光沢をもつアワビなどの一枚貝が主とみられる。

貝製品は、イモガイを使用した雲珠以外には、1号、6～9号、22、23号遺跡で出土している。6号、8号遺跡からは、石製品の有孔円盤に似た形状の「有孔貝製品」が、5号、22号遺跡にも複数の円孔をもつ貝製品があるが、これらと返納品の貝製品とはやや様相が異なる。他にも報告書に図示されていない貝製品があるとみられ、貝製品の全体像については、別に検討する余地がある。

表 1 貝製品

番号	内容	残存長cm	残存幅cm	穿孔	穿孔径(最大)	穿孔径(最小)	重さ(g)	備考
1	貝製品	7.4	1.7	有	0.3	0.2	3.5	
2	貝製品	3.7	3.2	有	0.3	0.2	10.8	
3	貝製品	7.1	2.8	有	0.31	0.12	9.4	
4	貝製品	5	4.4	有	0.48	0.4	10.4	
5	貝製品	7.9	5.7	有	0.32	0.29	29.1	
6	貝製品	6.2	3.5	有	0.42	0.4	18.4	
7	貝製品	2.7	1.6	有	0.21	0.18	1.1	
8	貝製品	4.1	3.7	有	0.4	0.4	4.5	
9	貝製品	4.7	1.2	無	—	—	2.5	
10	貝製品	3.8	1.8	無	—	—	1.6	
11	貝製品	3.7	2.1	無	—	—	1.6	
12	貝製品	3.2	1.8	無	—	—	0.8	
13	貝製品	3.5	3.5	無	—	—	1.9	
14	貝製品	2.1	1.2	無	—	—	1.5	
15	貝	3.4	3.3	無	—	—	12.6	サザエ
16	貝製品	1.4	0.7	有	—	—	0.5	窪みあり
17	貝製品	1.8	0.8	無	—	—	0.5	
18	貝製品	1.1	0.5	無	—	—	0.2	

まとめ

担当した金属製品だけでも種類は多様で、既報告の出土品との対照からみて、沖ノ島内の多数の祭祀遺跡を横断する形で採取されていることが判明した。「雛形鉄刀」や金銅製の「責金具」や「瓔珞」と報告される短冊状銅板など沖ノ島祭祀特有の器物を数多く含んでいた。また、倭製の金銅装大刀の装具片とみられるものが複数確認できた。沖ノ島祭祀自体は国際色豊かな奉納品を持つが、確認できる武器類は倭系に偏る傾向があり（水野2025）、これを再確認させる資料である。同時に、報告書記載を上回る数量の大刀の奉納を窺わせるものである。その他に、文様を打ち出した銅板片や穿孔された貝製品（玉類）が確認できた。前者は、打ち出しを持つ銅板という点で、5号遺跡出土品に類品があるものの、これまで明確に認識できていなかった資料である。後者の貝製品は報告書での記載が少なく、沖ノ島祭祀における貝製品の全体像はやや不明な点があり、貝製雲珠を除けば、多くが穿孔された貝製品である。返納品では確認できる円孔が1つであることから、22号遺跡などの楕円形で複数の円孔を持つ貝製品とは様相が異なる。細長く加工された勾玉などを指向した貝製玉類の可能性を持つ。

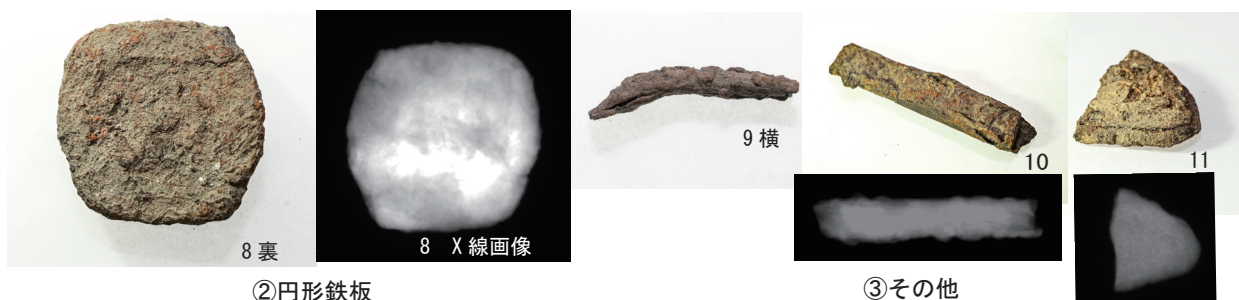
検討した返納品は、沖ノ島祭祀に特徴的な奉納品を含み、資料として一括性は高く、いずれも沖ノ島祭祀奉納品とみて良いと考える。

参考文献

- 宗像神社復興期成会1958『沖ノ島』吉川弘文館
 宗像神社復興期成会1961『続沖ノ島』吉川弘文館
 宗像大社復興期成会（第三次沖ノ島学術調査隊）1979『宗像 沖ノ島』精興社
 水野敏典2025「7・8号遺跡出土の鉄製武器と金属製品の再検討に向けて」『沖ノ島研究』第11号

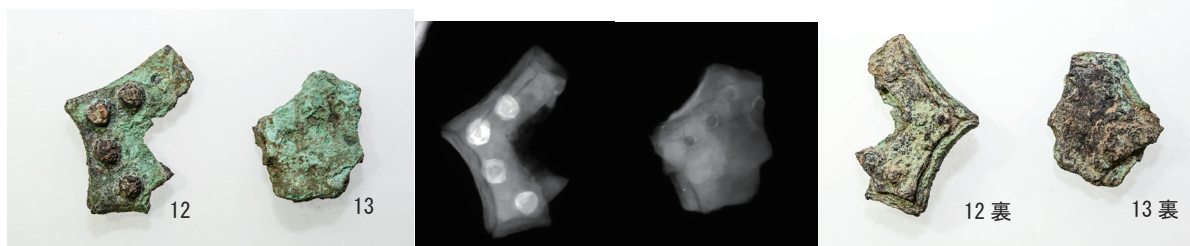


① 雛形鉄刀・鉄製品ほか

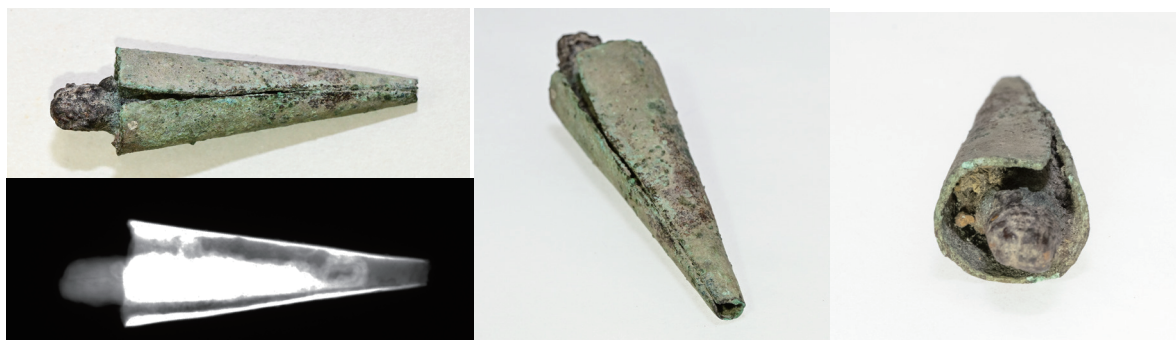


② 円形鉄板

③ その他

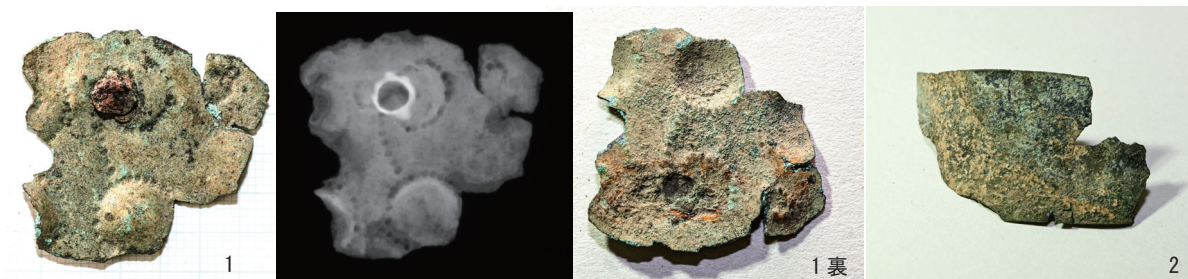


④ 子持剣菱形杏葉片

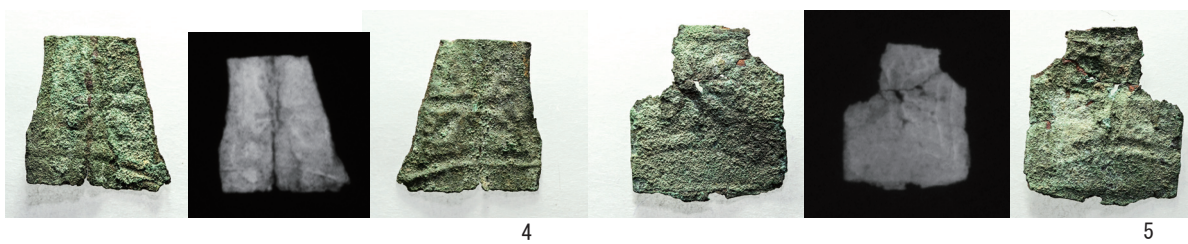
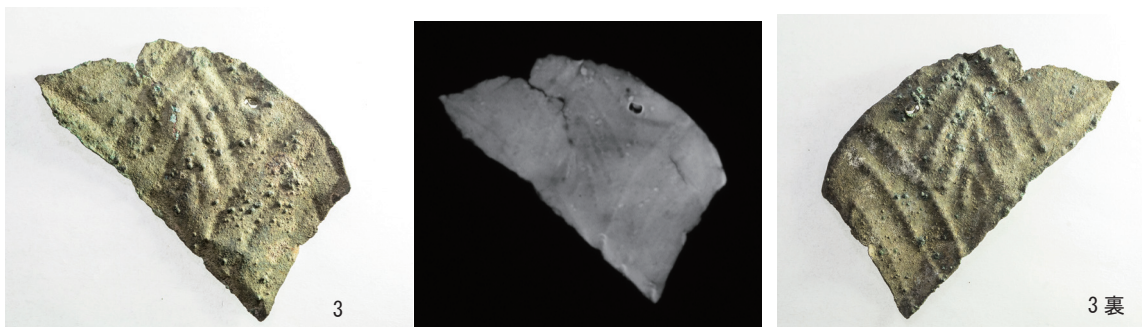


⑤ 鐸

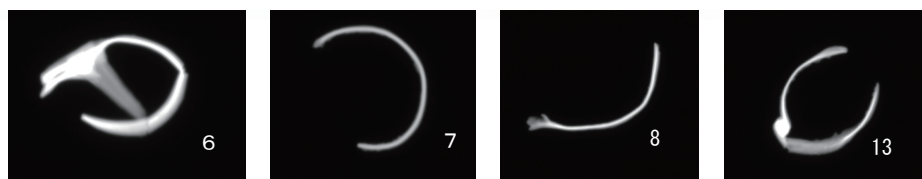
図版1 鉄器類・その他



①刀装具



②打ち出しをもつ銅板片

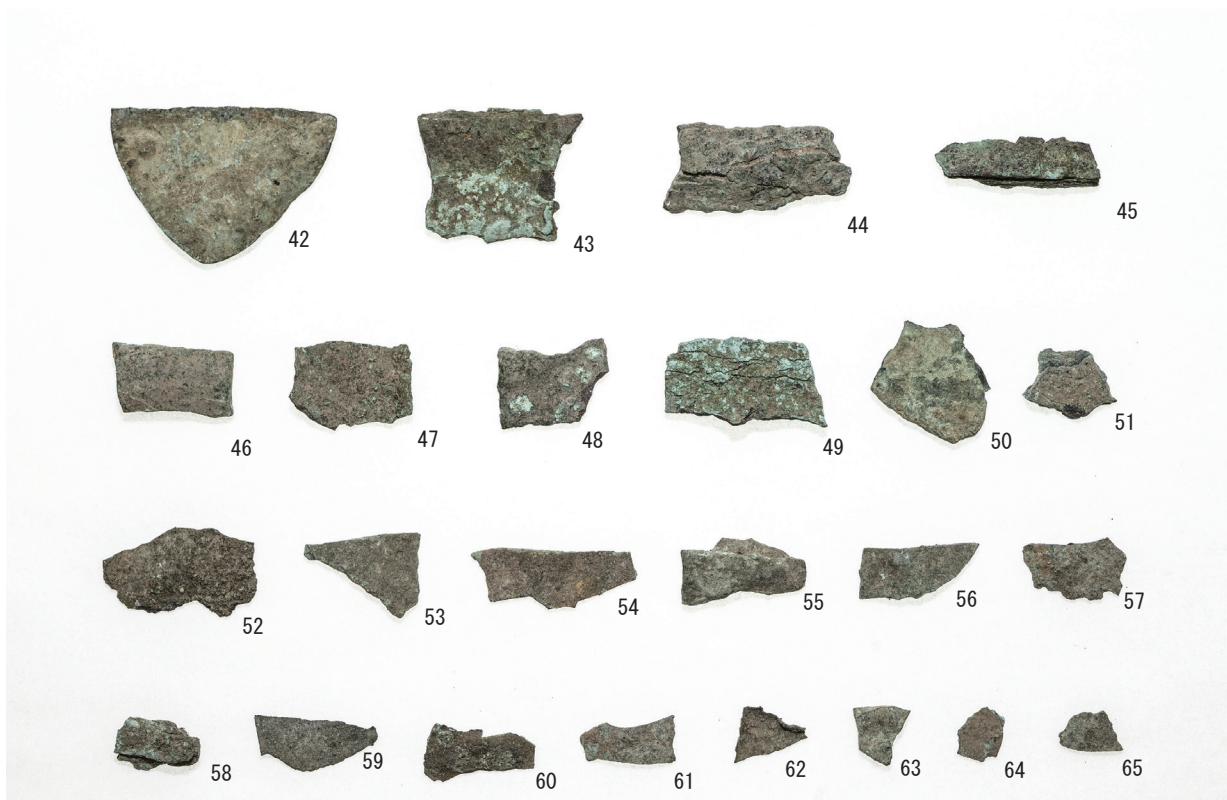


③金銅製責金具

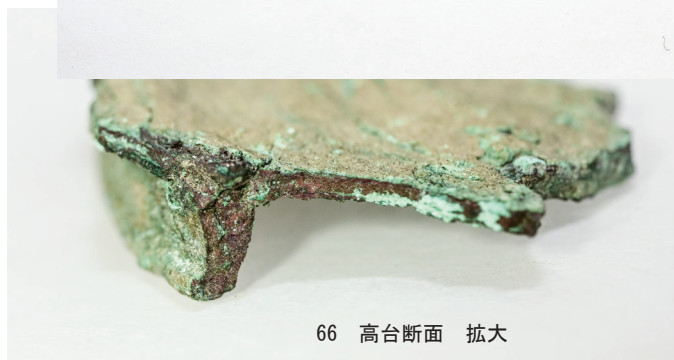
図版 2 金銅製品 1



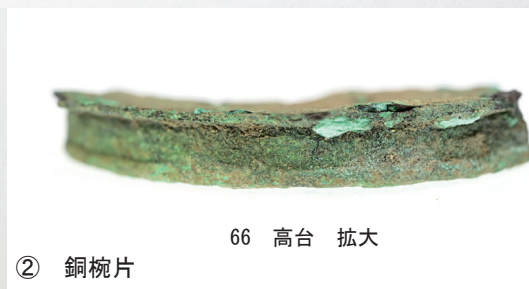
図版 3 金銅・銅板片



① 銅片



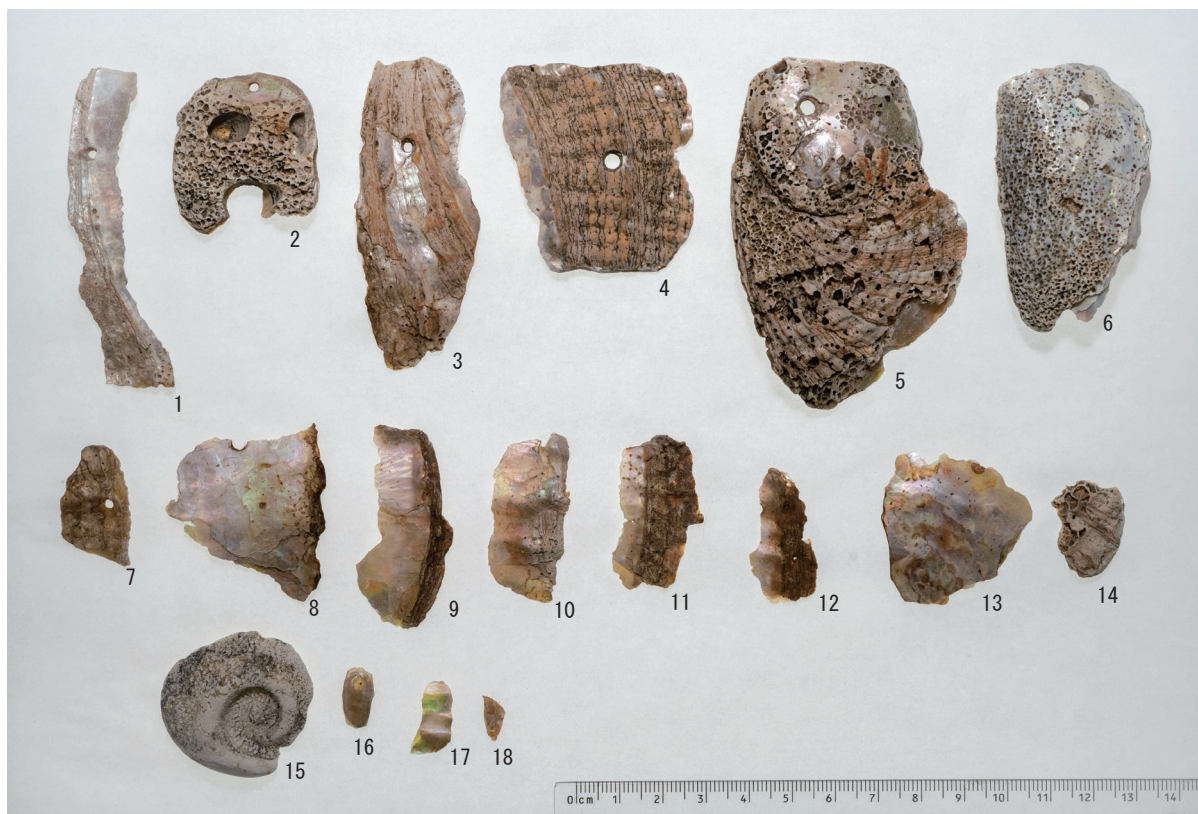
66 高台断面 拡大



66 高台 拡大

② 銅椀片

図版 4 銅製品 他



①貝製品ほか 表



②貝製品ほか 裏

図版 5 貝製品と貝

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2